

SHIMANTOGAWA MONOGATARI

2020.11.25
Vol.289

2020年四万十川の川漁総まとめ！



北川川の解禁日(2020.6.15)の様子と北川川で獲れた鮎(2020.7.9)【リバーマスター豊田庄二さんより】

清流通信をご愛読いただきありがとうございます。
四万十川では、下流域を除いてほとんどの川漁が閑散期に入りました。今回は、四万十川全域における今年の川漁状況をまとめました。上流～下流、近年の傾向、今年の鮎についてご覧ください。

上流

■ 四万川・北川の状況

四万川

【鮎】例年通り。まあまあ楽しんだ。しかし、冷水病が出て死んだ鮎がちらほらいたこともあり、ネットで情報が回って釣り師があまり来てなかった。春先に大雨が出て下ったように感じる。この辺りは、愛媛が近いので愛媛から釣り人がよく来る。その人たちが今年も釣っていたようだが、魚体は小さかった。放流鮎を5月の例年より1月遅い時期に入れたのがいけなかったのかもしれない。それよりも鵜が多く、鮎を大量に食べるため非常に困っている。

【あめご】かなりおったと思う。放流したのが育ったのだと思う。

北川

【鮎】冷水病が出たけど、増水もあってあまり見えなかった。鮎が死んだという人もいる。最初の大きい鮎は早く下ったようだ。

【あめご】10月末に産卵を始めたが、例年より魚体が小さい。

(津野山魚族保護会 影浦賢さん・豊田庄二さん)

■ 上流淡水地域の入荷量と状況

【鮎】生鮎が欲しいお客さんが多いため、5～6月は断るくらい注文が殺到したが、この時期は鮎が獲れなかった。その後は、コロナの影響で注文が少なくなり、売れない状況が続いている。6月を過ぎてから鮎の入荷が多くなったが、売れないため火振り鮎を1人20キロくらいに制限をかけていた。今年の鮎は細くて小さい傾向から買い手の料亭さんたちも見栄えが悪くて嫌がっていた。調査によると大野見までほとんど天然で、家地川堰堤を超えて大量に遡上したようだ。今年は小さいというけど、昔の「津野山鮎*」と言われるような鮎も登っていくのを見た人がいる。
(四万十川上流淡水漁業協同組合 池田組合長)

* 津野山鮎：四万十川の上流よりで獲れる大型のアユで、平均全長は25～26cmで体重200gに達し、中には33cm・400gの大物も。

中流

■ 東部漁協地域の状況

【鮎】 今年最高！天然の鮎がものすごい量いた。釣りも火振りもものすごい獲れた。東部は四万十川の中でも一番組合員が多く火振りの許可が79人あり。みんな楽しませてもらったよ。

【鰻】 ダメだな。2日間で100kg放流したけど今年は獲れていない。

(四万十川東部漁業協同組合 武政組合長)

■ 西部漁協の入荷量と状況

【鮎】 よう釣れた。去年が釣れなくてどうしようかと思ったが、今年はたくさん釣れた。他の川で釣れないようで、釣り師がよそからもたくさん来て日券が足りなくなるほどだった。みんな楽しんでるようだった。川が安定せずに、火振り漁が9月はできなかったが、10月の追い上げがすごかった。1日300キロ以上入ることもあって、朝から晩まで鮎を袋に入れる作業で大変だった。全体的に鮎が小ぶりで、特大がいなかった。大きい鮎が釣りたい人は物足りなかったかもしれないね。

	鮎(kg)	鰻(kg)	川エビ(kg)	ツガニ(kg)	ナマズ(kg)	スッポン(尾)
4月		31.1	0.5		59.2	2
5月		84.0	40.2		138.3	63
6月	552.2	93.1	69.2		78.0	38
7月	673.1	102.3	16.3		29.2	34
8月	2864.0	211.7	80.1	149.8	75.4	26
9月	921.5	18.9		1024.1	10.2	
10月	1523.4					
計	6534.2	541.1	206.3	1173.9	390.3	163

四万十川西部漁業協同組合「鮎市場」2020年度入荷状況

コロナの影響を心配したけど、今年は鮎の注文がめちゃめちゃあった。例年より多い！お店の送りは少なかったけど、個人の注文が多くなった。JALの広報に鮎の塩焼き冷凍が載って爆発的に売れた時もあった。しかし、1年で一番売り上げる月の5月の売上が激減・・・8割減で過去最低だった。それから6～9月は配送注文が集中したのと観光客が増えてなぜか去年よりは売れている。

【うなぎ】 例年通り。いつもどおり。去年よりは少なかったように感じる。いつも通り足りずに終わる。

【えび】 多くなった。獲れているようだ。

【なまず】 少なかった。去年の4割くらい。こんなんもか？ってくらい少なかった。

【すっぽん】 例年並み。そんなに困るほどでなく、普通にはけた。

【つがに】 8月少なかったけど9.10月は例年並み。

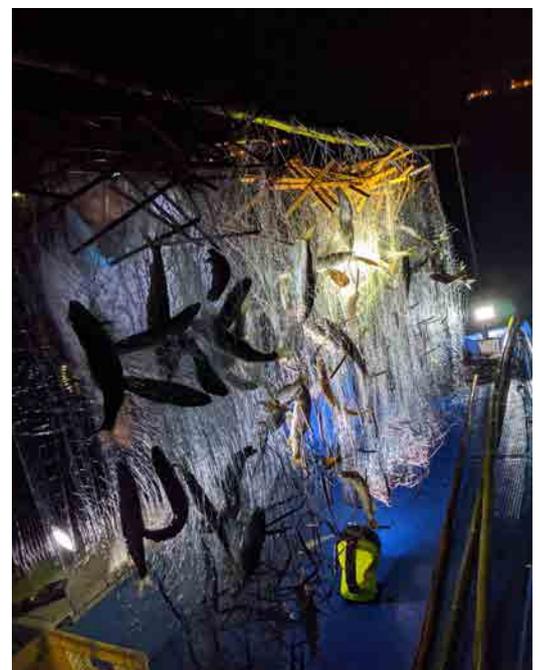
(四万十川西部漁業協同組合 鮎市場長)



西部漁業協同組合「鮎市場」の鮎入荷風景(2020.10.6)



四万十川中流域四万十町十川の小野地域(2020.10.6)



四万十川中流域の火振り漁(2020.8.21)

下流

■中央漁協の状況

【鮎】夏は全然とれなかった。体感では去年の60%くらいかな。禁漁まえに鮎が下がってきたのがギリギリ獲れた。春の遡上が良くて去年の2倍くらいだったけど大したことなかった。梅雨の長雨でずっと水が多くて餌を食べずに育ってないし、夏は渇水が続いて暑かったから、小さく痩せて成長できていない鮎が多い。落ち鮎は期待しているが、10月末でも鮎がはねてない。

【鰻】大したことない。例年より少ない。

【エビ】去年よりもよくなって右肩上がりになっている。禁漁が効いているのかもしれない。

【ゴリ】例年よりも少ない。

【ツガニ】下るのが遅かった。鮎の火振りの時によくかかるのに今年は最後の辺りにしかかからなかった。

■のりとシラス

【のり】暖冬のせいであおさのり(3t)もあおのり(400キロ)も全然ダメ。不漁の年だった。

【シラス】春はすごく良くて大豊漁！300キロ獲れて途中で県の規定のもとストップがかかった。毎年100キロ未満なのに。下りウナギの気配は1か月遅れていたように思う。

(四万十川漁業協働組合連合会 堀岡会長)



仔魚流下調査で獲れた鮎の仔魚(2020.11.16)【四万十川中央漁協より】



四万十川下流で産卵後に死んで川の養分になりつつある鮎(2020.11.20)



落ち鮎が始まる前の産卵場の整備(2020.11.20)



鮎の卵 孵化した後の卵や目が見えるものもいる(2020.11.20)

データでみる四万十川の鮎 (図①)

過去7年の入荷量(四万十川西部漁協「鮎市場」と四万十川上流淡水)と鮎仔魚流下密度、鮎遡上量をデータで見て、今年の鮎について考えてみよう。

■入荷量

入荷量は、それぞれ鮎市場と上流淡水漁協で漁獲された鮎の量(kg)である。鮎市場は中流、上流淡水漁協は上流がメインとなる。

他にも、幡多公設地方卸売市場に鮎は卸され、市場取引が行われている。漁師個人が消費し、個人売買をすることも多い。そのため鮎漁獲の全体実数は不明。

■鮎仔魚流下密度

毎年、四万十川中央漁業協同組合が行っている調査で得られたデータである。その年の鮎が産卵し、孵化した後の鮎仔魚の流下数(1m³あたり尾数)である。11月初めごろから1月終わりまで週に一回、同時刻に行われている。同じ場所にネットを設置し一定時間流した後、採取した仔魚を固定し、尾数を計測するという方法だ。

■鮎遡上量

毎年、四万十川中央漁業協同組合が行っている調査で得られたデータである。その年の鮎が遡上する2月後半から5月まで週に一回、同じ時間で行われる。布地を川に入れ、目視で遡上している鮎の尾数を30分間計測する方法である。

■データを見る

その年の流下密度が高いとそもそもの母数が多いため、仔魚の死亡率が高くない限り、遡上量は多くなる。遡上量が多いと入荷量も自然と多くなるはずである。

しかし、この遡上量と流下密度は短期間に変化が激しく、調査日外にも大量の移動がある場合がある。また、仔魚の育つ冬の海水温が高いと死亡率が上がり、流下密度が高くても遡上量が少なく、入荷量が減少すると言われる。

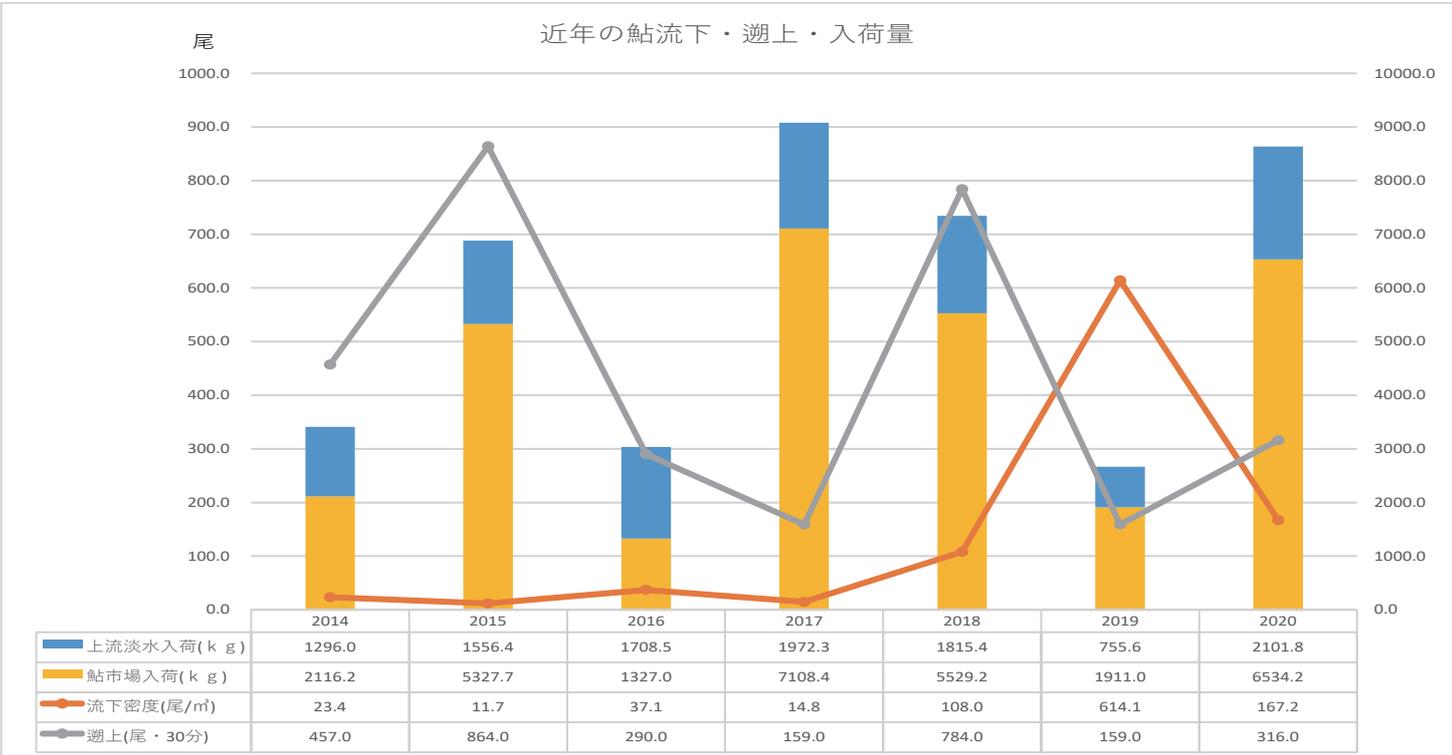
過去7年の傾向を見てみよう。

2017年が特異。入荷量は最高であるが、流下密度と遡上量は非常に低い。前年2016年の鮎の少なさを考えると流下密度と遡上量が低いことは理解できる。加えて、この年は、海水温過去最高を記録するなど、仔魚の生存率が絶望的だと言われ漁協関係者たちも落胆していたのだ。しかし、ふたを開けてみると稀に見る大豊漁!基本的な考え方から大きく外れ、驚きの年だった。

2019年を見てみよう。流下密度は過去7年間で最高だが、暖冬で海水温が高かったため仔魚生存率が低かったと考えられる。そのため、入荷量も過去7年で最低を記録した。これは、基本的な考え方に沿った年だった。

今年の傾向を見てみよう。流下密度と遡上量はともに多い傾向にあり、仔魚の生存率が高かったようである。その結果、入荷量も多いといえそう。しかし、前年2019年の鮎の少なさと暖冬だったことから考えると、今年の鮎の多さは異例。2017年と同じく一般的な考え方から外れた年だった。

近年の四万十川の鮎は様々な変化をしていることがこのデータよりわかってもらえただろう。



データ提供元：四万十川中央漁協・西部漁協・上流淡水漁協

今年の鮎の疑問

たかはし河川生物調査事務所の高橋勇夫さんに今年の鮎の疑問を聞いてみた。

高橋さんは、鮎の生活史の基礎研究をベースに、全国各地の河川で漁協の人たちと天然鮎を増やす活動に取り組んでいる。

四万十川にも何度も調査研究に入っており、県内や全国の河川と比較して四万十川の状況を教えてくれた。

■近年まれにみる多さはどうして？

今年の四万十川は鮎が多いというが、鮎の生息密度にむらが多かった。5月は淵やトロ場は泥が薄く被っていて、鮎は少ないという印象だった。その一方で、コケのある瀬には鮎が集まっているように見えた。つまり、川全体に鮎がいるわけではなく、瀬にだけいるような感じ。川全体に鮎がいた「鮎が多い年（1990年代前半）」に比べたらまだまだだが、ここ10~20年では一番の量だったように思う。

これがなぜかという、当たり前なことなのだが、鮎の遡上量が多かったからである。

今年の遡上は、3月中旬までが多い傾向で、県内全域でその時期までは良かった。しかし、それ以降の遡上に変化が見られた。4月以降、四万十川から宿毛湾にかけての小河川の遡上は引き続き良かったようだが、新莊川よりも東の河川では遡上が少なくなり、全体でみるとこの10年間で最低レベルの遡上の悪さだった。

四万十川の遡上良かったのはなぜか？通説では、仔魚の成育の観点から暖冬だと鮎が少ないと言われるが、今年は妙に違ったようだ。海水温だけでは説明できない何かの関係してきている。プラスになることとしては、去年、鮎は少なかったが魚体が大きく放卵量が通常の大きさの鮎に比べて数倍あったこと。また、高めの温度に強い遺伝子が残り適応しつつあるのかもしれない。

■魚体が小さく細いのはなぜ？

鮎の量が多いため、基本的に餌が足りずに大きくなれないということが考えやすい。しかし、四万十川のキャパシティで考えると今年の鮎の量で餌が足りないということは起きないはず。正直言って分からない。

仮説としては、遡上期の遅い鮎が多くいたため成長しきれない。または、暑い本流の川から逃げて支流の小さい河川に逃げ込み、その河川で過密になって成長しきれなかった。そして、夏場の高水温のせいでエネルギー消費過多になってやせてしまったのかもしれない。

■鮎が多いと川がきれいになる

今年の四万十川はきれいだった。鮎は川の掃除屋なので鮎が多いときれいな川になる。実際、富栄養化の原因ともなるリンを、コケを食べることで体内に骨として蓄積し、結果的に水中からリンが取り除かれる。生物浄化だ。今年は「鮎がこじゃんと多かった」という声が多く聞かれた。しかし、四万十川のキャパシティに対して、多いとは思えない。この量で「平年よりも少し多い」という認識になるくらいまで資源回復してほしい。

最近ラニーニャが発生したので、来年か再来年は鮎の回復の年になると期待している。



高橋勇夫

1957年高知県生まれ。2003年に「たかはし河川生物調査事務所」を設立。以来、全国の河川に関わりながら研究調査を行う。



大好きな鮎をおしゃれにワインのお供として食べることも。

まとめ

今年は、不思議な川の年だった。特に鮎は「例年通り」という言葉が通用しない。毎年、新しく生まれ変わる鮎だが、今年の鮎は四万十川の奥広くに分布し、小さく細いのが特徴だった。

全国的にも鮎が獲れないと言われたが、四万十川にはそこかしこで跳ねる鮎を見た。そして、それを追う人々もたくさん見かけた。コロナの影響もあって鮎を売る人たちは苦労したかもしれない。しかし、コロナの影響で自然を求める人が増え、川にも人があふれた。そして鮎がいる。今年、アユ釣りを始めた人も多かったのではないだろうか。

この鮎が多かったのはなぜか。わからないとしか言いようがないが、仮説はいくつか上がった。遡上量が多く、早い時期にも遅い時期にも上った。なぜ、遡上

する仔魚がこんなにも生存できたのか。それは、四万十川の広大な汽水域が問題を複雑にしているようだ。それでは小さく細いのはなぜか。単純にエネルギーに対して摂食が足りていないのだろう。しかし、大きい鮎も禁漁時期近くにはいたことからバランスがとれていたのかもしれない。以前、鮎が最盛期だった時代を知る人に聞くと、今よりも鮎がたくさんいたが、こんなに小さく細い鮎がいっぱいいた印象はない、かなり変だという。

毎年、謎を残して去っていく鮎。今、産卵期を迎えている。仔魚流下調査も好調のようだ。今年はたくさん楽しませてくれてありがとう。また、来年たくさん戻ってきますように。



四万十川中流四万十町小野の瀬 友釣りの風景 (2020.10.06)



四万十川本流家地川堰堤上 投網一投げで大量の鮎 (2020.10.16)



四万十川中流四万十町小野の瀬 鮎漁禁漁2日前の風景 (2020.10.13)